

カウシカ・スートラのダーリラ釈

辻 直四郎

難解をもつて鳴るカウシカ・スートラ(Kauśika-Sūtra)の理解に、ダーリラ・パッタ(Darīlaha)の注釈が重要であることは、アタルヴァ・ヴェーダの研究者の常識である。カウシカ・スートラの出版者 M. Bloomfield はダーリラ釈のため、いわゆるヘルリン写本(書写 1840 A. D.)およびこれと本源を同じくし誤記をも共通にする他の一写本(書写 1829 A. D.)を利用した。それから八十年余を経た今日も、ダーリラ釈の写本の稀であることに変わりはなく、本出版もまた現在チュービンゲン大学図書館に保管されるかつてのヘルリン写本を、唯一の資料とせざるをえなかつたという。

周知の通りこの写本はカウシカ・スートラの第六章第一節(通算第四八節)の終りまでに対する注釈を含み、いたるところ誤謬に満ち満ちている。五人の著名のヴェーダ学者を動員して企てられた本出版は、完成のあかつきにおいて、(一)カウシカ・スートラおよびケーシヤヴァ(Keśava)の祭式要覽(Paddhati)の批判的出版、(二)ダーリラ釈、(三)カウシカ・スートラの英訳ならびに詳細な序文と注記からなる予定で、今

回はその重要性にかんがみ、まずダーリラ釈が学界に提供された。これによつてわれわれは始めてこの注釈の全貌に接するをえて、単に語句の解釈にとどまらず祭式の過程にも言及するダーリラ釈の特質を正しく認識し、出版者の苦心に深い感謝を捧げる次第である

注釈者ダーリラについては何ら詳細なことは伝わらず、ただ彼が尊敬した曾祖父がヴァツツァシャルマン(Vatsārman)と呼ばれ、勝れた学者であつたことを知るのみで、年代もつまびらかでない。またダーリラ釈はカウシカ・スートラ第四九節以下に及んでいないが、元来これ以下の注釈は書かれなかつたか否かも断定されない。ケーシヤヴァは第四九節以下の部分においてもダーリラに参照しているが以前の部分に関する引用が、必ずしも現存のダーリラ釈の文句と一致しない事実が指摘されているため、ケーシヤヴァが手にしたダーリラ釈は現存のものと同じでなかつたか、或いはダーリラの他の著作に依つたものか知るよしもない。(本書序文一頁参照。)このケーシヤヴァのパッドティに関して、出版者の一人 Divekar 博士は、新たに三写本を入手したといっている。始めてカウシカ・スートラ七——五二節の学術的翻釈を試みた W. Caland によれば、このパッドティは時にダーリラ釈に勝るとう(Alindisches Zauberritual. Amsterdam 1900, p. V)。カウシカ・スートラの出版・訳注と合せ

て、その批判的出版は学徒の等しく切望するところと信じてゐる。

以上の諸点は出版者の簡潔で要を得た序文から窺いえるが、次は本出版の特異点について一言したい。カウシカ・スートラの研究者にとりダーリラ積の貴重なことは、ここに繰返すまでもないが、その伝承の極めて不正確なことも事実である。出版者は一句ごとに写本の誤謬を訂正する必要がある、しかも最少の改訂によつて最大に本文を円滑化するに努めている。かつ読者に批判・選択の余地を与えるため、写本をそのままオフセット版にし、対称のページに改訂された本文を印刷している。極めて良心的な処置として称讃に値する。

以下任意の一部分を例として、写本ないし Bloomfield の脚注と比較して、今回の改訂出版がいかに便利であるかを窺ふこととする。もちろん詳細な研究を意図するものではないから、写本の軽微な誤記或いは容易に訂正しうる誤謬には触れない。

カウシカ・スートラ一四・一——六 敵軍の象を驚かすための呪法

スートラ一 特筆すべき訂正は少なう。例えば、*hasṭibala-*
hetuvāt: *ms. hasṭibale h°*. *saṅgatakarane*: *ms. saṅgaka-*

批評と紹介 辻

raṇe. punargrahanam: *ms. paragrahanam*.

スートラ二 *tasya ca rathasya cakrāṇi (nut.) saṃpātā-*
vat kṛtvā: *ms. tasya ca rathacakrāṇi saṃpātāvanitām*
(mac.) k°. は「文法の上から見て適當な訂正。ただしダーリラが *rathacakreṇa saṃpātāvātā* を「用具・手段 (*karaṇa*) を表わす instrumental case を用いて」原因・理由 (*hetu*) を表わすそれ (*hetulakṣaṇā tīrīyā*; cf. *Pāṇ. II, 3. 23*) と解している点は意外である。——*parabalāhasṭino yuddhāya pravartamānaṁ dīśamāyāṁ rathacakreṇāgrato gatvā hastinaḥ pravartayati*: *ms. parabalāhasṭina yuddhāya pravartamānaṁ dīśamāyāṁ rathacakreṇāgrato patryā hastinaḥ p*. 意味は訂正によつて始めて明瞭となった。「戦闘のため前進してくる敵軍の象を見るやいなや、車輪をもつてその前面に進み「味方の」象を前進させる。」ただし最後の動詞 *pravartayati* を *parivartayati* と改めれば、「敵軍の」象を転進すなわち退却させる意味となつて、さらに適切である。

スートラ三 *yāty aneneṭi*: *ms. yāneneti*. ダーリラによれば「行者 (*kartṛ*) は王の司祭臣 (*purodāh*) である」。

スートラ四 *abhiyāti śeṣaḥ*: *ms. °ti viśeṣaḥ*. なお写本は *bheryādini* の *°* を *°* と *vādiṇi* を *°* とした *°* である。

スートラ五 *anuvāsanaḥ* (cf. *Pāṇ. V, 11, 111*) *carma*:
ms. anuvāsana ° 「綴革や皮革の皮革」かな *°* *basti-*

は「香ばぬ草袋の一種」を意味する。スーリーに従えば、*dr̥ti-* は *basti-* の *dr̥* である。この石を入れることなる (*etayar anyatarena*; cf. “in einen Schlauch (oder) eine Blase”, Caland)°。

スーリーは *totrena*: *nagnapracchannah*: *ms.* *totrena nagnah prachanna (h).* 時々 *dr̥ti-* の *nagnah* の後で終結している。スーリーは *nagnas cāsau prachannas (ms. pravṛtas)* *cei nagnapracchannah, nagnapṛavṛta ity arthah* と訳しているが、正確な意味は不明。Cf. Caland *op. cit.*, p. 27, n. 1: “Er ist nagnah in so fern er kein Unterkleid, prachannah, in so fern (nur) ein Oberkleid trägt”. Wackernagel: *Altind. Grammatik* II, 1, p. 172; p. 200 (Speyer の別説)°——*totrañ hasitodanah*: *ms.* *totrastenodah, veluka iti prasiddhanān*: *ms.* *v° iti prasiddhān*°. Bloomfield は *venuka iti prasiddhanāma* と訳している (ed. p. 37, n. 13)°。n. 1 の交結は極めて稀である (cf. *Vedic Variants* II, § 273)° *veluka-* の確証はなかなかにある。Bloomfield は賛成する。

卷末の Appendix A: Critical notes, references etc. 及び B: Additional notes は、スーリー訳の理解に必要な参考箇所を克明に列举し、Appendix C は固有名詞・植物

名・動物名等の索引で、共に本書の利用者に多大の便宜を提供している。H.R. Diwekar, V.P. Limaye, R.N. Dandekar, C. G. Kashikar, V. V. Bhide: *Kausīkasūtra-Dārīabhāṣya*. Critically edited for the first time on the basis of a single codex which is reproduced by offset process. Tīlak Maharashtra Vidyapīṭha Post-graduate and Research Department Publication. XVI, 36 pp., 136 double pages, 59 pp. (Appendices, Corrigenda) Poona, 1972.

ブリアン・デヤ 「南インド」

薮 勇 造

この書は、M・ウェーラー卿が監修者となり、世界各地で実際の調査活動に携わっている第一線の考古学者が、各々の専門領域を担当執筆している『New Aspects of Antiquity』なる叢書の一冊である。まず著者のB・デヤは、二十世紀初め、彼は一九二〇年の生まれ、専攻は美術と建築学である。第二次大戦後の一九五一年に英政府派遣の建築技師としてインドに赴き、当時英保護領であった南インドからマドラス州にかけての地方を広く踏査し、各地に散在する遺跡を実際に見聞する機会に恵まれた。そして一九六二年には、